

4h 刺激した細胞では TLR2 の発現が増加したが、TLR4 及び 9 の発現に大きな変化は無かった。 *P. aeruginosa* 存在下で FOM は TLR9 の発現を増加した。一方で、FOM は *P. aeruginosa* 存在下での TLR2 の発現に影響しなかった。本研究から FOM による免疫修飾作用として、免疫細胞の寿命短縮、及び細菌 DNA を介した免疫細胞の炎症反応の誘導が関与している可能性が示唆された。

## 6 LMT-chamber 法による小児の抗菌薬に対するアレルギー症例の検討

大石 智洋・小澤 淳一・小嶋 絹子  
阿部 忠朗・塚野 真也・田口 哲夫  
八木 元広\*・宇野 勝次\*\*

県立新発田病院小児科  
水原郷病院薬剤部\*  
福山大学薬学部\*\*

【目的】小児では成人に比し使用可能な抗菌薬が少なく、抗菌薬アレルギーが疑われる場合、治療薬の選択が困難である。そこで、小児を対象とした抗菌薬アレルギーの検討を行った。

【方法】抗菌薬アレルギー疑いの 9 名 (5 ヶ月～12 歳) に対し、原因と思われる薬剤と、同系統の他の薬剤につき、LMT-chamber 法により検討した。

【結果】LMT 陽性は 6 例 (ペニシリン (Pe)、セフェム (Ce) (2 例)、オキサセフェム (Ox)、カルバペネム (Ca)、14 員環マクロライド (Ma)) で、発現症状は皮膚症状 5 例、発熱 1 例で、潜伏期間は 30 分～4 日であった。Pe-Ce、Ca-Ce・Pe、Ox-Ce、14 員環 Ma-15・16 員環 Ma 間では交差反応を認めなかった。

【考察】使用可能な抗菌薬が少ない小児では、アレルギーか否かの見極めおよび代替薬の検索は非常に重要であるが、過去に報告はあまりなく、さらなる検討が必要と考えた。

## 7 当院におけるリネゾリドの使用経験

佐藤 牧・津畑千佳子・手塚 貴文  
太田 球磨・田邊 嘉也・下条 文武  
田村 隆\*・青木 寿成\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
臨床感染制御学分野 (第二内科)  
新潟大学医歯学総合病院薬剤部\*  
同 診療支援部臨床検査部門\*\*

2006 年 4 月に 4 番目の抗 MRSA 薬であるリネゾリド (LZD) が承認されたことに基づき、当院での LZD の使用状況に関して報告する。

2006 年 4 月 1 日～2007 年 2 月 28 日までの 11 ヶ月間の当院入院患者で LZD を使用した 63 症例 (72 エピソード) について使用状況、臨床効果や副作用をレトロスペクティブに検討した。平均年齢は 65 歳で平均投与期間は 11.7 日であった。

基礎疾患は消化器系が半数以上を占め、使用頻度は術後感染、呼吸器感染、敗血症、骨感染の順であった。

他の抗 MRSA 薬での無効例のうち 50 % で有効であった。副作用は血小板減少、貧血、肝機能障害が代表的で中止に至ったのは 6 例であった。

前投薬なしに使用されているものが 32 例 (44.4 %) あった。当院では抗 MRSA 薬の使用に関し、届け出制や使用制限など設けていないが、適正使用に関し今後、ICT などを通じ積極的に介入していく必要性が考えられた。

## 8 高齢者市中肺炎に対する抗菌薬選択の現状

樋口多恵子・太田 求磨\*\*\*・古川 俊貴\*\*  
川村 邦雄\*・藤森 勝也\*

県立柿崎病院薬剤部

同 内科\*

県立津川病院内科\*\*

新潟大学医歯学総合病院総合診療部\*\*\*

【目的】日本呼吸器学会成人市中肺炎診療ガイドラインの重症度分類 (A-DROP) 及び PORT コホート研究の予測基準 (PSI) による高齢者市中肺炎患者の層別化と抗菌薬有効率及び入院後 30 日以内死亡率について検討を行った。

【方法】過去3年間に高齢者市中肺炎で当院に入院した患者(164例・男82例・女82例)を対象に重症度分類, 初期治療に使用した抗菌薬, 治療経過について検討を行った。

【結果】平均年齢82±8歳。65～74歳17%, 75～84歳45%, 85歳以上38%であった。抗菌薬別使用割合は, ペニシリン系25%, セフェム系47%, カルバペネム系21%であった。A-DROP軽症・中等症・重症・超重症の有効率(%)は5例/5例(100%)・82/104(79)・32/42(76)・8/13(31), 死亡率は0/5(0)・4/104(4)・6/42(14)・4/13(31), PSI軽度・中等度・重度のそれは54/59(92)・52/67(78)・21/38(32)及び0/59(0)・2/67(3)・12/38(32)であった。

【結論】A-DROP重症度, PSI危険度が上がるとともに死亡率は増加し有効率は減少した。

## II. 特別講演

### 「日米の市中肺炎ガイドライン」

財団法人 倉敷中央病院  
呼吸器内科主任部長

石田 直

## 第47回新潟化学療法研究会

日時 平成20年6月21日(土)  
午後3時30分～

会場 新潟グランドホテル 3F  
悠久の間

### I. 一般演題

#### 1 小児呼吸器感染症における尿中肺炎球菌抗原キットの有用性の検討

白井 崇準・小澤 淳一・松尾 真意  
根岸 潤・阿部 忠明・小嶋 絹子  
金子 孝之・大石 智洋・塚野 真也  
田口 哲夫

県立新発田病院小児科

2008年4月1日から5月27日までに当院小児科外来受診・入院した生後21日から13歳までの, 発熱や呼吸器症状のある患者53名の小児について, 尿中肺炎球菌抗原, 末梢白血球数, 血清CRP値, 後鼻腔PCR検査を施行した。尿中抗原の測定は, 尿中肺炎球菌抗原迅速キット(NOW Streptococcus Pneumoniae urinary antigen test, Binax, USA)を使用した。対象患者53名のうち尿中抗原検査を同時に施行したのは38名, 尿中抗原陽性患者は6名であった。そのうちPCRで肺炎球菌が検出されたのは5名であった。尿中抗原陰性患者は32名, そのうちPCRで肺炎球菌が検出されたのは23名であった。その結果, 本検査の感度は17.9%, 特異度は90.0%であった。本検査は小児において初期治療での抗菌薬選択に重要な情報が得られ, 有用と考えられたが, 発熱から48時間以内の陰性の評価は慎重に行うべきと考えられた。